

第4回資源管理方針に関する検討会の 指摘事項について

令和6年10月16日(水)

資源管理方針に関する検討会
～スルメイカ全系群～

水産庁

第4回資源管理方針に関する検討会の指摘事項

- 1 近年の低加入を踏まえた管理目標等について検討する。
- 2 単年生というスルメイカの資源特性を踏まえた柔軟な管理について検討する。
- 3 TAC管理のほかに資源回復に資する管理措置について検討する。
- 4 スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する資料を提示する。

指摘事項への回答

- 1. 近年の低加入を踏まえた管理目標等の検討
- 4. スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する資料の提示



第4回資源管理方針に関する検討会の
指摘事項の検討結果等について

注) 本発表における用語について



本発表において使われている

- 目標管理基準値
- 限界管理基準値
- 禁漁水準
- 漁獲管理規則

は、あくまでも試算において算出された各値を意味するものであり、現在スルメイカに適用されているもの、あるいは現時点において、令和7管理年度以降の管理への適用を企図しているものではありません。

説明上必要な指標・情報ですので、便宜上このような呼び方をしております。

第4回SH会議取りまとめ事項

- 近年の低加入を踏まえた管理目標等を検討
- 単年生というスルメイカの資源特性を踏まえた柔軟な管理を検討
- T A C 管理のほかに資源回復に資する管理措置の検討
- スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する資料を提示

本日の報告内容

1. 近年の低加入を踏まえた管理目標等の検討結果
 - a. 冬季発生系群についての検討結果
 - b. 秋季発生系群についての検討結果
2. スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する情報

1. 近年の低加入を踏まえた管理目標等の検討結果



1. 令和5年度評価をベースに、**次の①から③の3パターン**について試算。
 - ① 資源評価に利用可能な全期間のデータを使用して推定した**再生産関係**に基づいて**管理基準値**（目標管理基準値、限界管理基準値、禁漁水準）を算定し、この管理基準値に基づく漁獲管理規則により**将来予測**を行う。なお、将来予測における加入量推定値は、全期間のデータを使用して推定した再生産関係に基づくものとする。
 - ② 管理基準値の算定方法は①と同様とした上で、将来予測における加入推定値には、令和5年度評価で用いたバックワードリサンプリングを使用する。
 - ③ 過去の親魚量と加入量の関係から「低加入期」を推定した上で、当該低加入期のみのデータを用いて推定した**再生産関係**から管理基準値を算定し、この**管理基準値**に基づく漁獲管理規則により**将来予測**を行う。なお、将来予測における加入量推定値は、上記の低加入期の再生産関係に基づくものとする。
2. 1で行うそれぞれの将来予測において、5年後及び10年後にそれぞれ、限界管理基準値及び目標管理基準値を上回る確率（※ β は0.05刻み）を試算。

検討内容

※令和5（2023）年度資源評価結果を使用

手順1 再生産関係	手順2 目標管理基準値	手順3 将来予測 将来予測で使う 加入量推定値	
全期間の 親魚量 と加入量	全期間の 目標管理 基準値	パターン1	全期間のデータ
		パターン2	近年の低加入を 反映したデータ (バックワードリ サンプリング*1)
低加入の期間*2の 親魚量 と加入量	低加入の期間の 目標管理 基準値	パターン3	低加入の期間の データ

*1 7枚目で説明

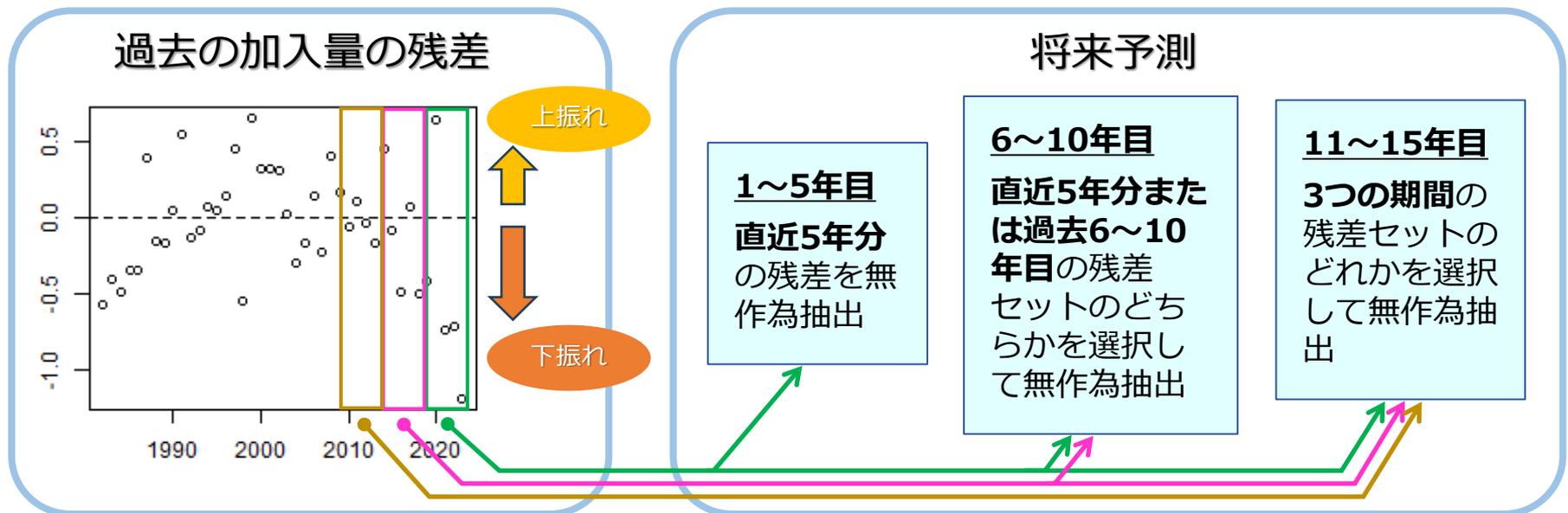
*2 8枚目で説明

バックワードリサンプリングについて

バックワードリサンプリングでは、**将来の加入**を以下のように想定

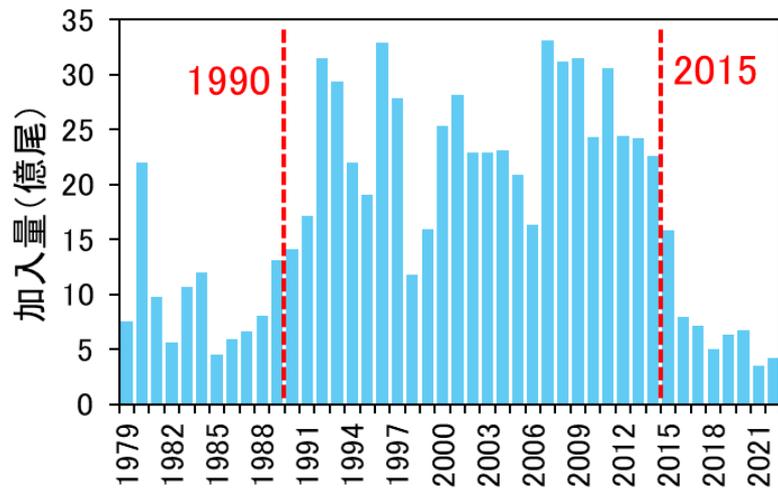
- 直近の将来は、近年の低い加入が継続
- その後、加入が徐々に回復

バックワードリサンプリング法（概念図）



低加入の期間について

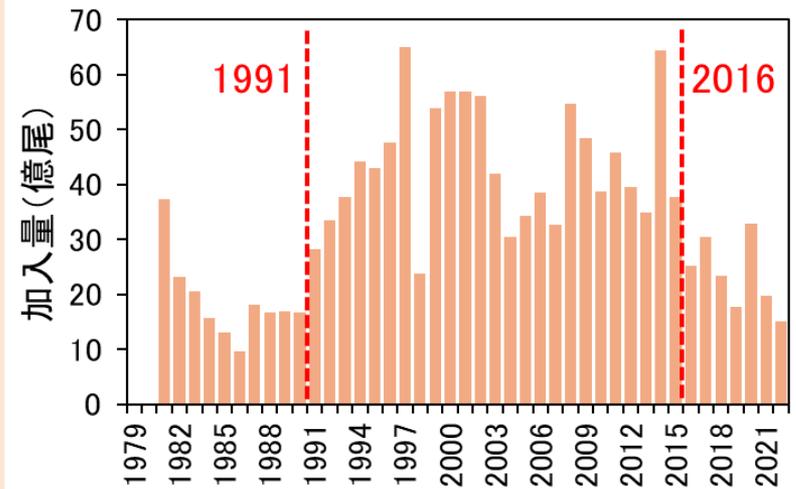
冬季発生系群



低加入の期間

- ① 1980～1989年
- ② 2015～2022年

秋季発生系群



低加入の期間

- ① 1982～1990年
- ② 2016～2022年

- 1988/1989年
- 2014/2015年

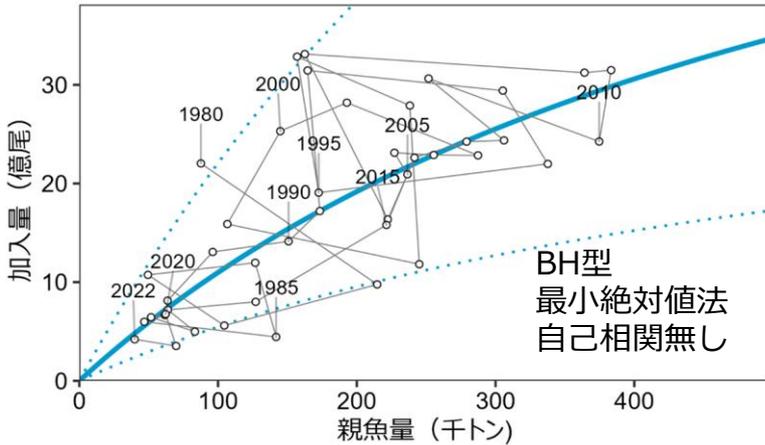
レジームシフト (寒冷期→温暖期)
PDO (太平洋十年規模変動) 負→正

a. 冬季発生系群についての検討結果

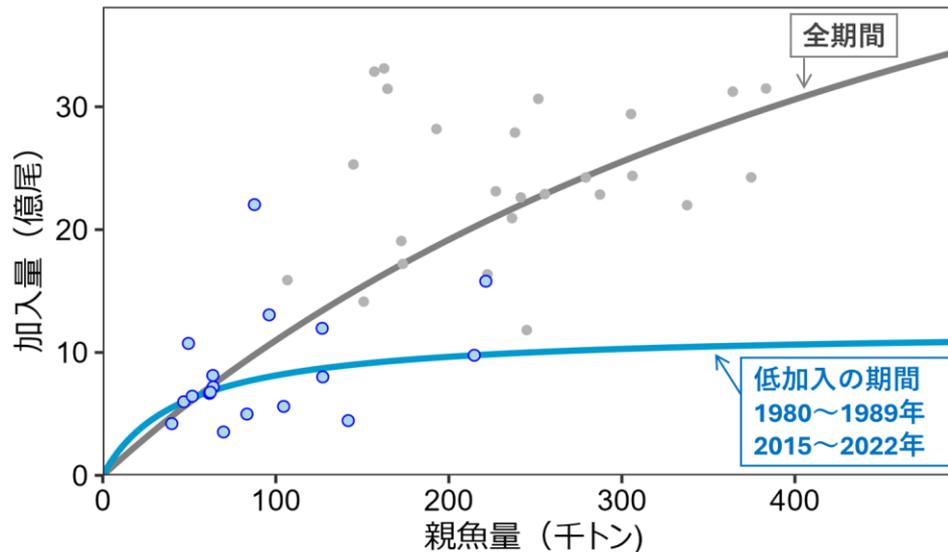
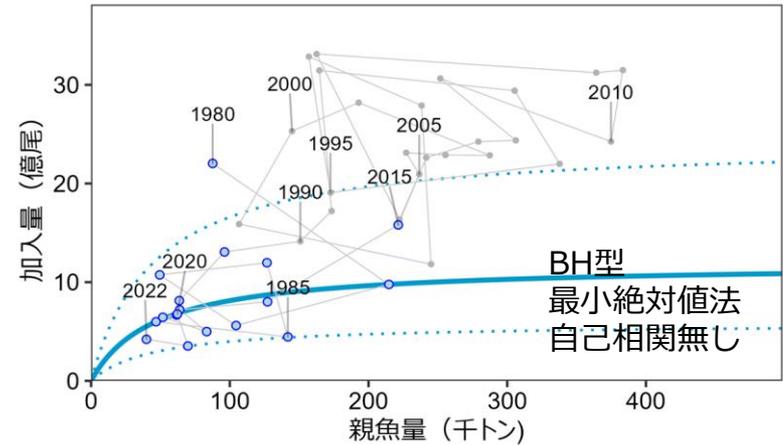


全期間と低加入の期間の再生産関係

全期間のデータによる再生産関係
(パターン1、2で使用)



低加入の期間のデータによる再生産関係
(パターン3で使用)



a. 冬季発生系群についての検討結果



管理基準値の比較

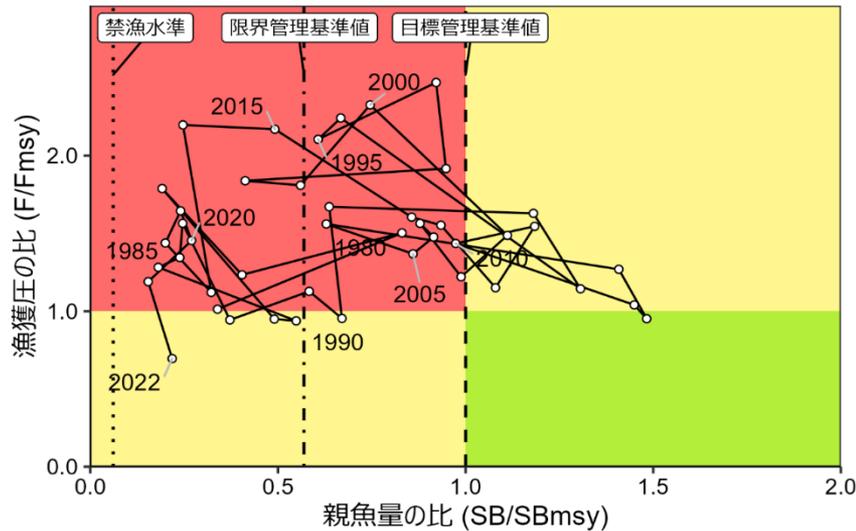
	現在適用されている 管理基準値など (R1年度資源評価)	今回の検討結果 (昨年度評価結果を使用)	
		全期間 (パターン1、2で適用)	低加入の期間 (パターン3で適用)
目標管理 基準値 (SBmsy)	23.4万トン	25.9万トン	4.9万トン
限界管理 基準値	13.2万トン (SB0.85msy)	14.7万トン (SB0.85msy)	1.8万トン (SB0.70msy)
禁漁水準	1.4万トン (SB0.15msy)	1.6万トン (SB0.15msy)	0.2万トン (SB0.10msy)

a. 冬季発生系群についての検討結果

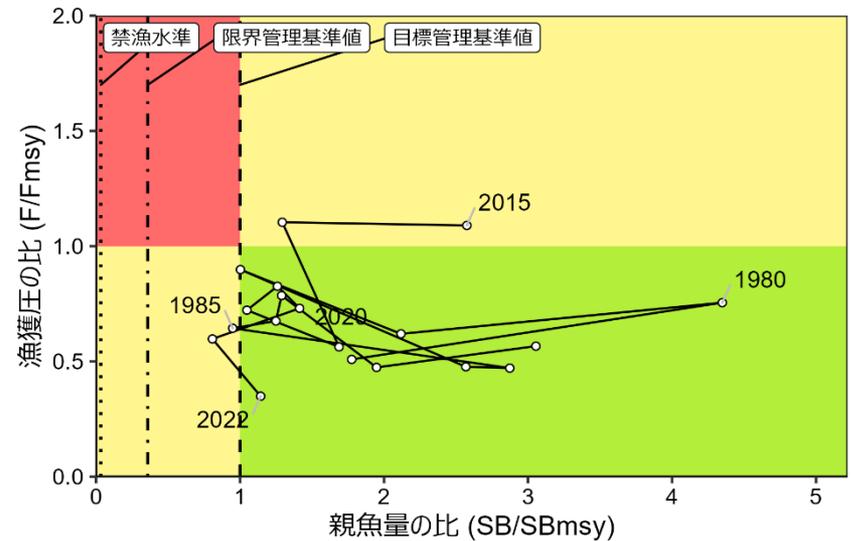


神戸プロット

全期間の管理基準値 (パターン1、2に関連)



低加入の期間の管理基準値 (パターン3に関連)



低加入の期間の目標管理基準値の下では、

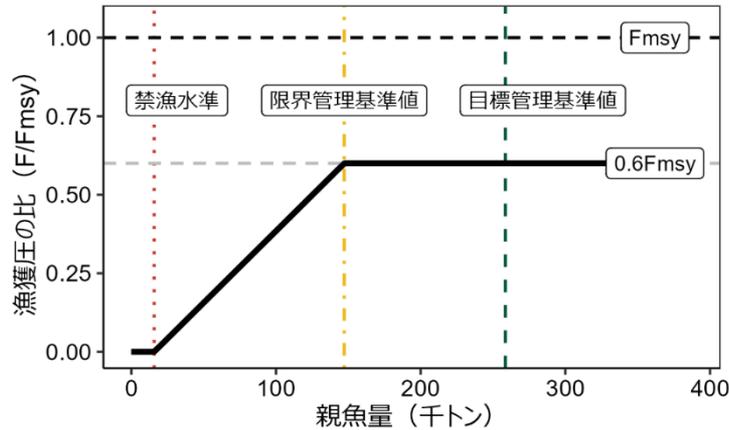
- 低加入の期間のほとんどの年でグリーンゾーン

a. 冬季発生系群についての検討結果

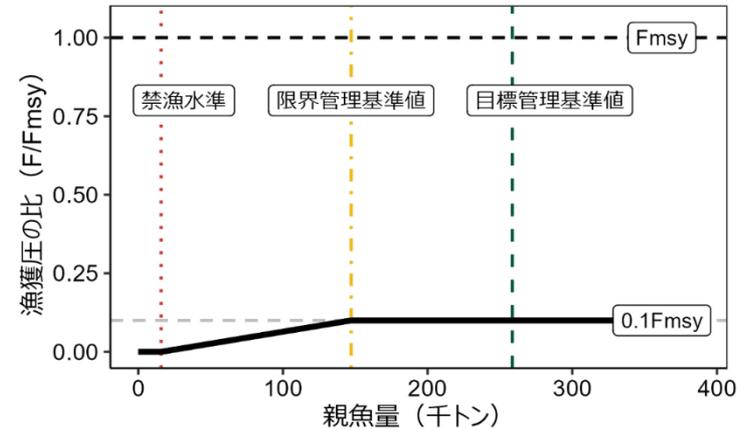


漁獲管理規則

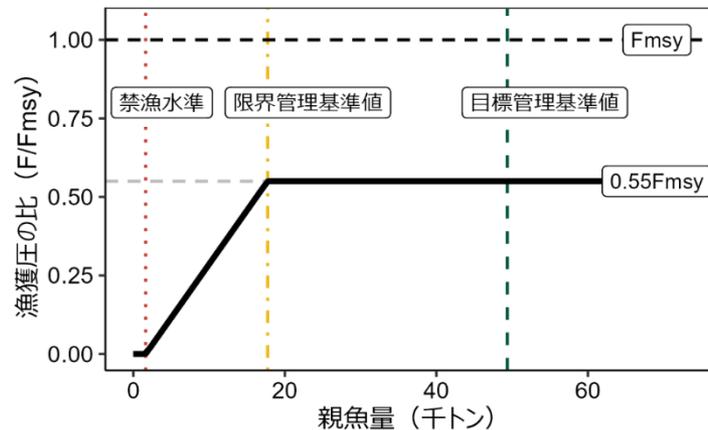
パターン1で使用する漁獲管理規則 ($\beta=0.60$ の例)



パターン2で使用する漁獲管理規則 ($\beta=0.10$ の例)



パターン3で使用する漁獲管理規則 ($\beta=0.55$ の例)



スルメイカノ管理目標

- ① 管理開始から5年後に親魚量が限界管理基準値を50%以上の確率で上回ること
- ② 管理開始から10年後に親魚量が目標管理基準値を50%以上の確率で上回ること

この管理目標は、冬季発生系群と秋季発生系群で共通

a. 冬季発生系群についての検討結果



将来予測 (パターン1)

親魚量が限界管理基準値を上回る確率 (目標: 5年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
1.00	0	6	28	41	49	51	54	55	53	54	51	51
0.95	0	6	29	43	50	53	56	58	56	57	53	54
0.90	0	6	30	44	52	55	59	61	59	60	57	57
0.85	0	6	31	45	53	57	60	63	62	63	59	60
F2020-2022	0	1	7	18	25	31	39	46	51	53	54	54

親魚量が目標管理基準値を上回る確率 (目標: 10年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.70	0	0	8	23	29	36	41	47	45	47	46	45
0.65	0	0	8	24	30	38	44	49	48	50	49	48
0.60	0	0	8	25	32	40	47	53	51	53	52	52
0.55	0	0	8	26	34	44	49	56	55	57	56	56
F2020-2022	0	0	1	4	6	10	14	17	19	22	23	24

平均漁獲量 (千トン) (上記2つを満たす β を選択する場合)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.70	19	5	26	55	75	85	92	102	103	104	108	106
0.65	19	5	25	52	72	82	90	99	101	101	106	104
0.60	19	5	23	49	68	79	86	96	98	99	103	102
0.55	19	4	21	46	65	75	83	92	95	95	100	98
F2020-2022	19	37	49	63	73	84	97	103	110	117	121	125

a. 冬季発生系群についての検討結果



将来予測 (パターン2)

親魚量が限界管理基準値を上回る確率 (目標: 5年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.20	0	0	4	24	38	46	60	70	76	81	82	88
0.15	0	0	4	24	40	48	63	73	79	83	85	91
0.10	0	0	4	24	43	51	66	76	82	85	86	92
0.05	0	0	4	25	44	55	68	79	84	87	88	94
F2020-2022	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	4

親魚量が目標管理基準値を上回る確率 (目標: 10年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.30	0	0	0	0	7	10	17	26	32	41	44	52
0.25	0	0	0	0	7	11	19	29	35	45	49	57
0.20	0	0	0	0	9	13	22	33	39	48	53	61
0.15	0	0	0	1	10	15	24	37	43	52	56	65
F2020-2022	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

平均漁獲量 (千トン) (上記2つを満たす β を選択する場合)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.20	19	1	3	7	10	13	15	19	21	23	25	29
0.15	19	1	2	5	8	10	12	15	17	18	20	23
0.10	19	1	2	3	5	7	8	10	12	13	14	16
0.05	19	0	1	2	3	4	4	5	6	7	7	8
F2020-2022	19	27	27	27	26	26	27	28	29	31	32	36

a. 冬季発生系群についての検討結果



将来予測 (パターン3)

親魚量が限界管理基準値を上回る確率 (目標: 5年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
1.00	100	74	62	56	52	54	55	57	55	57	54	54
0.95	100	76	65	59	55	56	57	59	58	60	57	57
0.90	100	78	67	62	57	59	60	61	60	62	59	60
0.85	100	80	71	64	60	61	63	64	63	65	63	62
F2020-2022	100	90	86	82	81	81	81	81	82	83	83	81

親魚量が目標管理基準値を上回る確率 (目標: 10年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.65	0	54	52	49	47	45	47	49	47	48	46	46
0.60	0	56	55	53	50	50	52	52	52	53	49	51
0.55	0	59	59	58	53	55	56	56	56	56	55	56
0.50	0	61	63	62	59	60	61	61	61	62	59	61
F2020-2022	0	58	58	57	52	54	54	55	55	56	54	55

平均漁獲量 (千トン) (上記2つを満たす β を選択する場合)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.65	19	45	48	47	45	42	42	43	43	42	44	42
0.60	19	43	46	46	44	42	41	43	43	42	44	42
0.55	19	40	44	45	43	42	41	43	42	41	43	42
0.50	19	37	42	44	42	41	40	42	41	41	42	41
F2020-2022	19	41	45	45	43	42	41	43	42	41	44	42

a. 冬季発生系群についての検討結果

将来予測結果のまとめ

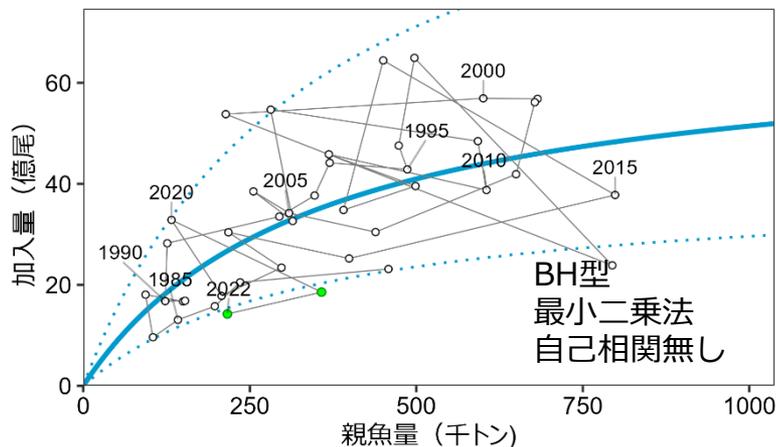
パターン	管理目標を満たす最大の β	1年目の漁獲量 (万トン)	5年後の親魚量 (万トン)	10年後の親魚量 (万トン)	目標管理基準値 (万トン)	限界管理基準値 (万トン)
1 (全期間)	0.60	0.5	27.0	33.9	25.9	14.7
2 (全期間+バックワードリサンプリング)	0.10	0.1	16.8	30.4		
3 (低加入の期間)	0.55	4.0	6.9	7.0	4.9	1.8

- ✓ 低加入の期間の目標とした場合（パターン3）、管理1年目の漁獲量が最も大きい
 - 現状の漁獲量よりも大きい
- ✓ パターン3の将来の親魚量はパターン1、2よりも小さい

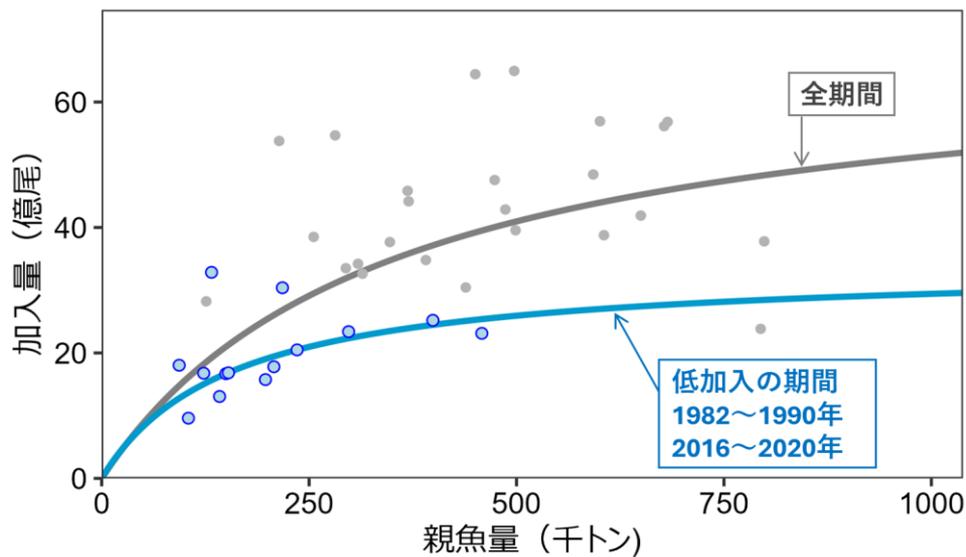
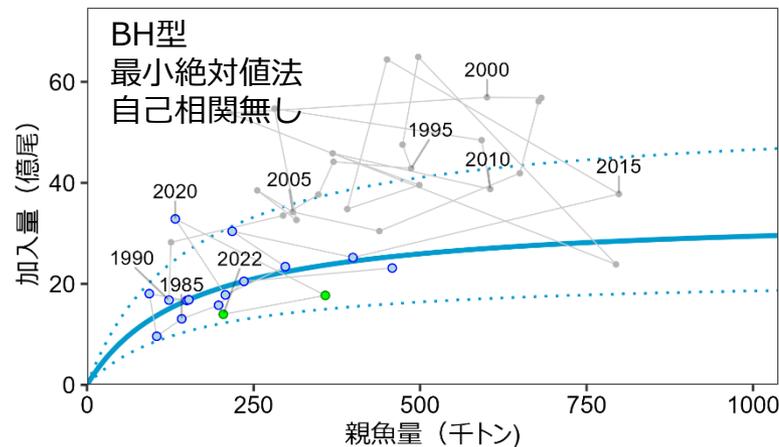
b. 秋季発生系群についての検討結果

全期間と低加入の期間の再生産関係

全期間のデータによる再生産関係
(パターン1、2で使用)



低加入の期間のデータによる再生産関係
(パターン3で使用)

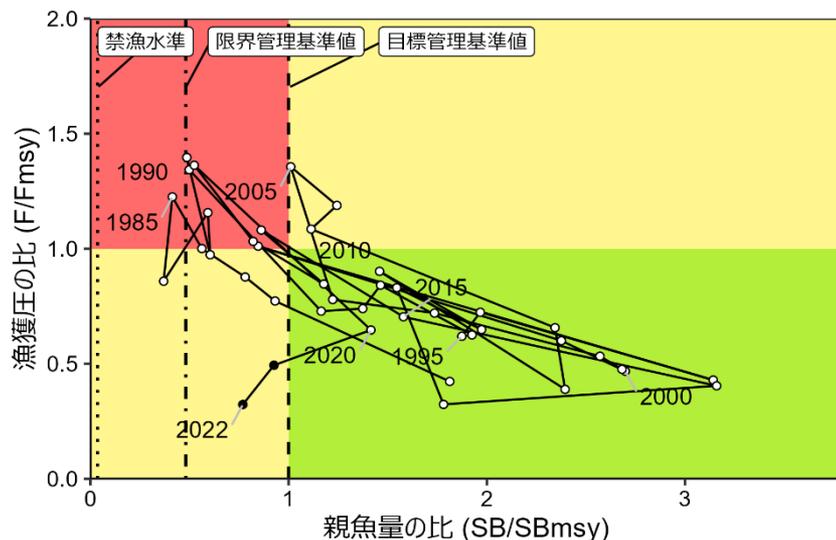


管理基準値の比較

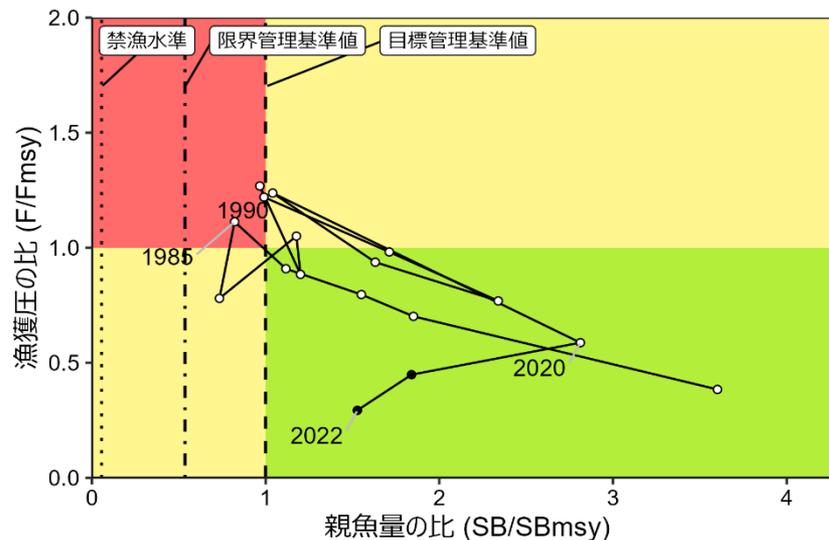
	現在適用されている 管理基準値など (R1年度資源評価)	今回の検討結果 (昨年度評価結果を使用)	
		全期間 (パターン1、2で適用)	低加入の期間 (パターン3で適用)
目標管理 基準値 (SBmsy)	32.9万トン	25.3万トン	12.7万トン
限界管理 基準値	18.9万トン (SB0.75msy)	12.2万トン (SB0.80msy)	6.0万トン (SB0.80msy)
禁漁水準	3.0万トン (SB0.15msy)	0.9万トン (SB0.10msy)	0.5万トン (SB0.10msy)

神戸プロット

全期間の管理基準値
(パターン1、2に関連)



低加入の期間の管理基準値
(パターン3に関連)



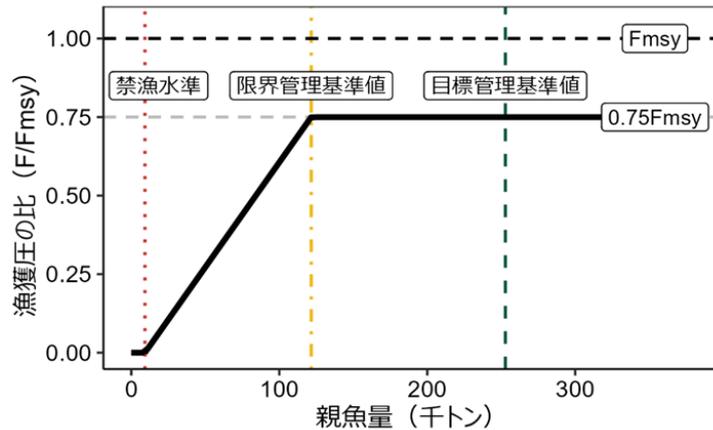
低加入の期間の目標管理基準値の下では、

- 低加入の期間のほとんどの年でグリーンゾーン

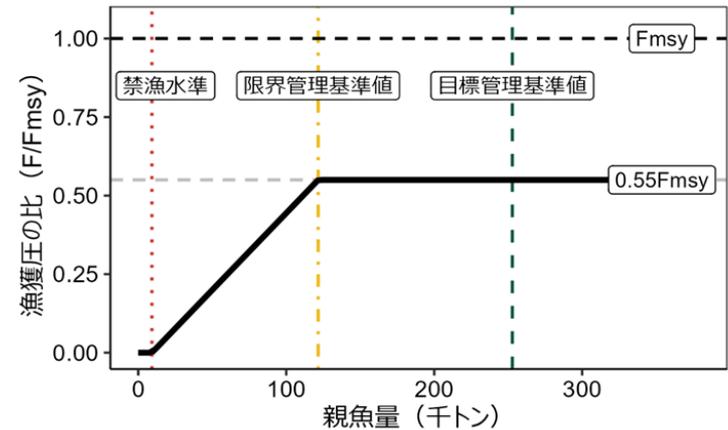
b. 秋季発生系群についての検討結果

漁獲管理規則

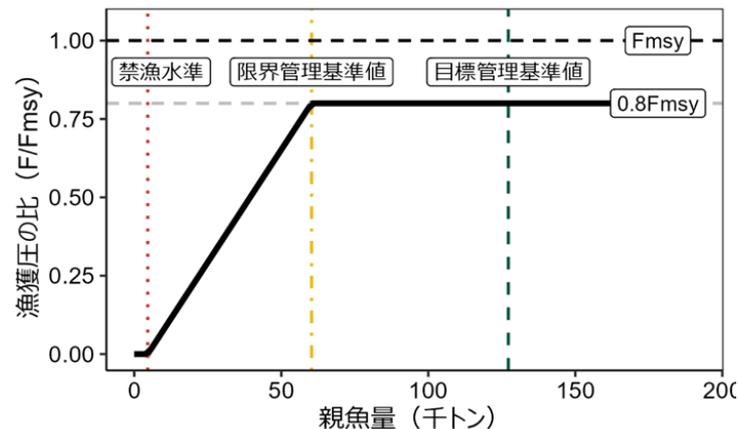
パターン1で使用する漁獲管理規則
($\beta=0.75$ の例)



パターン2で使用する漁獲管理規則
($\beta=0.55$ の例)



パターン3で使用する漁獲管理規則
($\beta=0.80$ の例)



b. 秋季発生系群についての検討結果



将来予測 (パターン1)

親魚量が限界管理基準値を上回る確率 (目標: 5年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
1.00	0	60	64	64	63	63	63	62	62	62	61
0.95	0	62	66	67	67	67	66	66	66	66	65
0.90	0	63	68	70	70	70	70	70	69	69	68
0.85	0	65	71	73	73	74	73	73	73	73	72
F2020-2022	0	79	95	99	100	100	100	100	100	100	100

親魚量が目標管理基準値を上回る確率 (目標: 10年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
0.85	0	12	29	37	40	42	42	42	42	42	41
0.80	0	13	31	40	43	45	46	46	46	46	45
0.75	0	13	33	43	47	49	50	50	50	51	50
0.70	0	14	36	46	51	53	55	55	55	55	55
F2020-2022	0	9	46	70	80	86	88	89	90	90	89

平均漁獲量 (千トン) (上記2つを満たす β を選択する場合)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
0.85	24	85	149	171	183	185	189	188	188	191	189
0.80	24	81	144	169	182	185	190	189	189	192	190
0.75	24	76	140	165	180	184	189	189	189	192	191
0.70	24	72	135	162	177	182	187	188	188	191	190
F2020-2022	24	70	108	140	160	172	177	180	182	182	182

b. 秋季発生系群についての検討結果



将来予測 (パターン2)

親魚量が限界管理基準値を上回る確率 (目標: 5年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
0.75	0	32	42	45	46	44	50	54	57	59	61
0.70	0	34	44	47	49	48	55	58	62	63	64
0.65	0	36	46	51	53	53	61	65	67	69	69
0.60	0	38	49	54	57	58	67	70	73	73	73
F2020-2022	0	20	52	74	83	89	95	97	98	98	98

親魚量が目標管理基準値を上回る確率 (目標: 10年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
0.65	0	20	21	22	23	22	28	34	39	41	42
0.60	0	20	22	24	25	25	31	39	43	45	46
0.55	0	20	24	25	27	27	35	43	48	50	50
0.50	0	20	24	27	29	30	39	47	52	54	54
F2020-2022	0	20	24	28	31	34	47	57	62	65	66

平均漁獲量 (千トン) (上記2つを満たす β を選択する場合)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
0.65	24	56	81	90	93	96	106	117	127	134	136
0.60	24	52	77	88	91	96	107	119	128	134	136
0.55	24	48	74	85	89	95	107	118	127	133	133
0.50	24	44	69	81	87	93	105	116	124	129	129
F2020-2022	24	57	75	89	98	104	119	132	140	145	147

b. 秋季発生系群についての検討結果



将来予測 (パターン3)

親魚量が限界管理基準値を上回る確率 (目標: 5年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
1.00	100	79	74	72	70	69	68	68	66	66	65
0.95	100	81	77	75	73	73	72	71	71	70	69
0.90	100	83	80	79	77	77	76	76	75	74	74
0.85	100	84	82	82	81	81	80	79	79	79	78
F2020-2022	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

親魚量が目標管理基準値を上回る確率 (目標: 10年後50%以上)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
0.90	0	37	41	43	43	43	42	42	42	42	41
0.85	0	39	45	47	47	47	47	46	46	46	45
0.80	0	41	48	50	51	52	52	52	51	51	50
0.75	0	44	52	55	56	57	57	57	57	57	56
F2020-2022	0	65	87	93	95	96	96	96	97	97	96

平均漁獲量 (千トン) (上記2つを満たす β を選択する場合)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033
0.90	32	106	113	114	114	112	112	111	110	110	109
0.85	32	101	110	113	114	112	113	112	111	112	111
0.80	32	97	108	112	113	112	114	113	112	113	112
0.75	32	92	105	110	112	112	113	113	112	114	113
F2020-2022	32	62	80	90	95	97	98	98	99	99	98

b. 秋季発生系群についての検討結果



将来予測結果のまとめ

パターン	管理目標を満たす最大の β	1年目の漁獲量 (万トン)	5年後の親魚量 (万トン)	10年後の親魚量 (万トン)	目標管理基準値 (万トン)	限界管理基準値 (万トン)
1 (全期間)	0.75	7.6	28.9	29.5	25.3	12.2
2 (全期間+バックワードリサンプリング)	0.55	4.8	22.1	31.0		
3 (低加入の期間)	0.80	9.7	14.4	14.2	12.7	6.0

- ✓ 低加入の期間の目標とした場合（パターン3）、管理1年目の漁獲量が最も大きい
 - 現状の漁獲量よりも大きい
- ✓ パターン3の将来の親魚量はパターン1、2よりも小さい

まとめ

目標管理基準値

- 低加入の期間のみのデータを用いて算出した目標管理基準値 (SBmsy) は、全期間のそれよりも小さくなる。
 - 現状の資源状態に対して目標が近くなる
 - 現状の親魚量はSBmsyを上回る

将来予測

【全期間のSBmsyを目標とした場合 (パターン1及び2)】

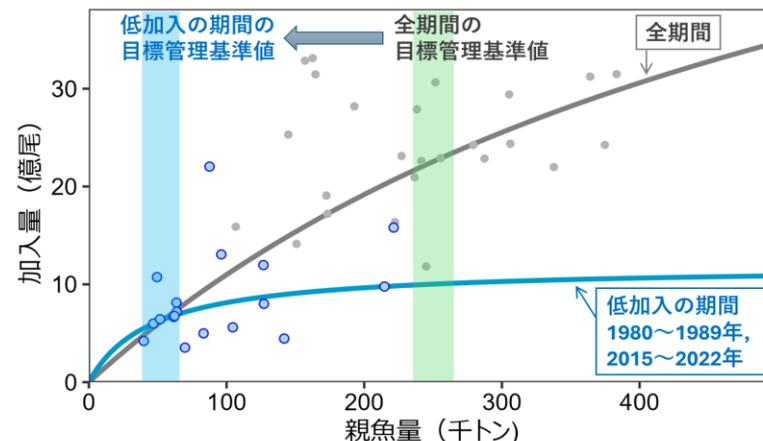
- 将来予測に用いる加入量推定値により、将来の親魚量や平均漁獲量が異なる。

例えば、近年の低加入を反映したデータ (バックワードリサンプリング) を用いると、管理1年目の漁獲量が小さくなる。

【低加入の期間のSBmsyを目標とした場合 (パターン3)】

- 現状の親魚量が目標を上回るため、管理1年目の漁獲量が、全期間のSBmsyを目標とした場合よりも大きくなる (現状の漁獲量より大)
- 現状の親魚量が目標を上回るため、将来の親魚量が全期間のSBmsyを目標とした場合よりも小さい (現状より親魚量を増やせない)

冬季発生系群のケース



2. スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する情報



The screenshot shows the homepage of the SH'U'N project website. At the top, there is a navigation bar with the SH'U'N logo and the tagline 'Sustainable, Healthy and "Umai" Nippon seafood project'. Below this is a large image of a yellowtail fish. The main content area includes a search bar, a navigation menu with icons for Home, About SH'U'N, News, Search, Evaluation, Resources, and External Release, and several informational sections. One section is titled 'さかな検索' (Fish Search) and another is 'SH'U'Nとは' (About SH'U'N). There are also links to download the app on the App Store and Google Play, and a video player showing a YouTube video.

SH'U'Nプロジェクト

(サステイナブルでヘルシーなうまい日本の魚プロジェクト)

「海にいる魚の量や増減」、「海の生態系」、「海での漁業活動」、「漁業を取りまく地域産業や社会」、そして食品としての「健康と安全・安心」などのどれか一つがかけても、水産物を持続的に利用することはできません。SH'U'Nプロジェクトでは、食卓と海とのつながりを見直し、将来にわたって水産物を食べ続けられるよう、みなさんに考えていただくきっかけをつくる活動を展開していきます。

Sustainable, Healthy and "Umai" Nippon seafood project : SH'U'N project

<https://sh-u-n.fra.go.jp/>

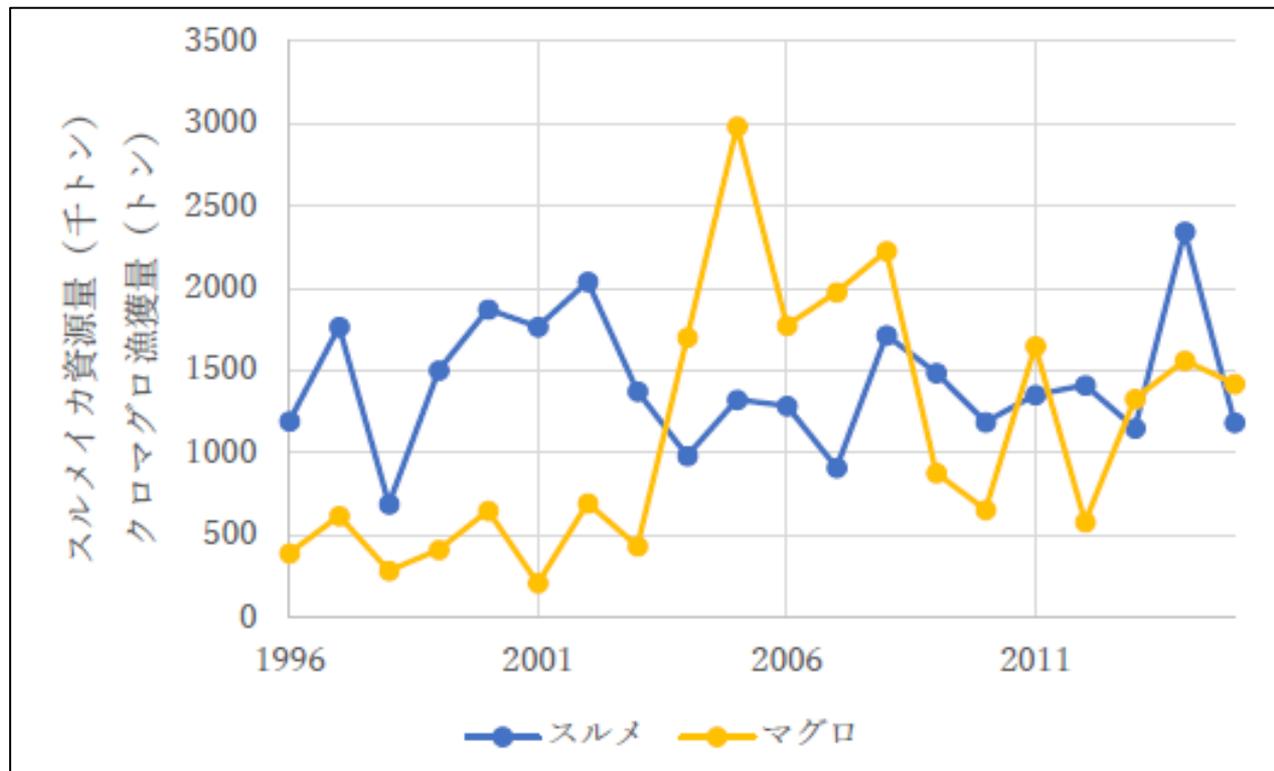
2. スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する情報

スルメイカ資源量とクロマグロ漁獲量の関係



SH"U"Nプロジェクト評価結果 スルメイカ日本海西部 (Ver 1.0.3) より

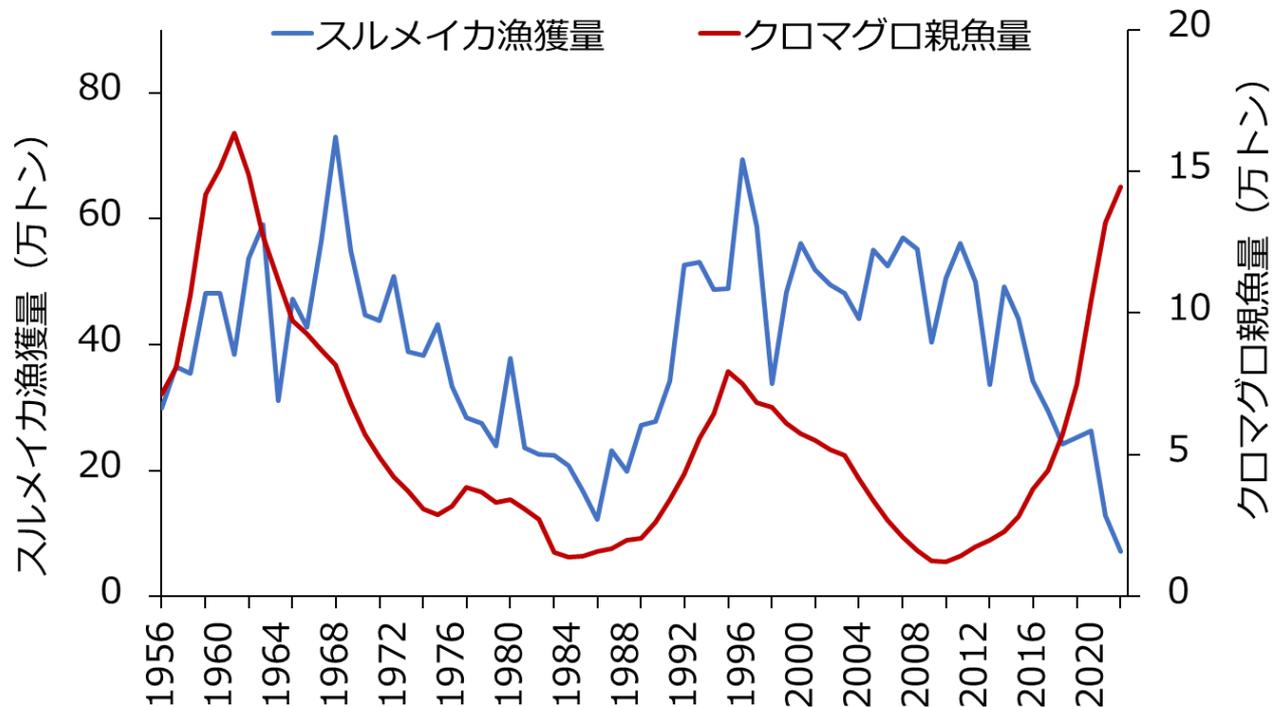
スルメイカ秋季発生系群の資源量と
クロマグロ漁獲量 (境港港) の経年変化



2. スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する情報

スルメイカ漁獲量とクロマグロ親魚量の関係（より長期間で見た場合）

※ISCのクロマグロ資源評価報告書（ISC 2024）のクロマグロ親魚量を参照し、下図を作成



- 1950年代から1990年代まではスルメイカ漁獲量とクロマグロ親魚量は似たような推移

2. スルメイカとクロマグロの捕食・被食に関する情報 クロマグロ食性の文献



Portner et al. (2022)



- カリフォルニア沖のクロマグロ（3～7歳以上）の食性研究
- 種不明イカ類が胃内容に占める割合は個体ベースで1～2%のときもあれば、17%のときもある
- イカ類を捕食はするが、その環境中に多くいる餌生物を捕食（イカ類を専食するのではない）
- クロマグロは柔軟な採餌行動をとる

Hiraoka et al. (2019)



- 日本海のクロマグロ0歳魚の食性研究
- 種不明の頭足類の胃内容に占める割合は重量ベースで0.5%

(2. 単年生というスルメイカの資源特性を踏まえた柔軟な管理の検討)

- 単年生というスルメイカの資源特性を踏まえた柔軟な管理としては、①漁獲可能量の一部を国が留保として保持し、あらかじめ定められたルールに従い、配分すること、又は②管理年度中の漁獲状況等に応じてTACの期中改定を行うこと、が考えられる。
- 留保による対応とする場合、留保枠の数量及び留保枠からの配分は令和7管理年度以降の資源管理の目標と漁獲シナリオの決定と関連する。
- 期中改定による対応とする場合、改定の根拠をどうするかが重要。
- 上記を踏まえ、具体的な対応について、次回SH会合までに検討。

<参考> 令和6管理年度における留保からの配分の運用

1 留保枠の数量

当初配分は直近3年間の平均漁獲量(2万9千トン)に抑えた上で、漁獲可能量から直近3年間の平均漁獲実績を差し引いた数量とする。

2 配分ルール

(ア)①8月までの国全体の消化率が当初配分量の35%未満で、②特定の管理区分の消化率が75%に達した場合には、

- ・ 75%ルールに基づいて、又は、
- ・ 水政審への諮問を経て、

当該管理区分の過去3年平均の漁獲実績を上限に、当該管理区分に追加配分を行う。

(イ)国全体の消化率が当初配分量の70%を超えることが見込まれる場合、

- ・ 漁期中調査の結果等を踏まえて、
- ・ 漁期末までの漁獲量予測とTAC配分量の差を上限に、
- ・ 水政審への諮問を経て、追加配分を行う。

(ウ)定置網漁業主体の北海道で漁獲が急激に積み上がった場合、75%ルールに基づいて追加配分を行う。

指摘事項への回答

(3. T A C 管理のほかに資源回復に資する管理措置の検討)

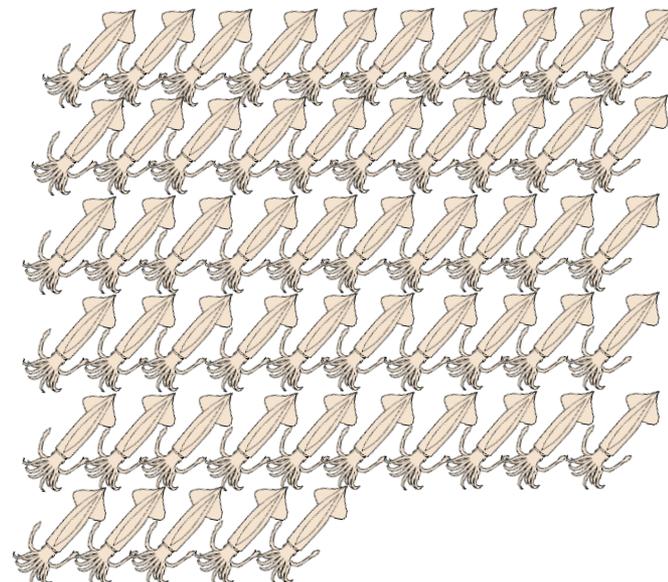
- 水産研究・教育機構の試算によれば、6月の時点で小型のスルメイカ(107グラム/尾)1トン(約9,300尾)を獲らない場合、半年後の12月には697グラム/尾に成長し、約3.6トン(約5,100尾)となる。
- ただし、スルメイカは単年生で、年によって来遊場所・時期やサイズの変動が大きい資源のため、統一的な管理措置として小型魚の獲り控えを採用することは困難。

6月



1トン=
107グラム×9,300尾

12月



3.6トン=
697グラム×5,100尾



指摘事項への回答

(3. T A C 管理のほかに資源回復に資する管理措置の検討)

- スルメイカの漁獲は地域毎の来遊場所・時期やサイズ、また漁業種類により多種多様であり、地域の実態に即した形で農林水産大臣又は都道府県知事が認定した資源管理協定に基づき、資源管理措置が行われている。なお、資源管理協定に基づき資源管理に取り組んでいる漁業者の減収を補填する方策として、漁業収入安定対策を講じている。
- また、毎年協定の履行確認をしながら、有効期間5年の間、中間時及び終了時に効果検証を行うこと、検証結果も含めて公表することで透明性高く運用し、より効果的な自主的管理の実現を目指している。

参考：資源管理の推進のための新たなロードマップ（抜粋）

